

嗜み 憎悪・争い和らげる心

「ご趣味は？」
 「お茶を少々嗜む程度で……」
 なんとも日本人らしい会話だ。
 人生をどう生きるか、社会の中
 で自分をどのように位置づけるか
 は永遠の問いだ。神や王が外から
 規律を課す社会もある。自分の能
 力や立場を外に効果的にアピール
 し、他との競争の中で自己の地位
 の確立を目指す社会もある。
 日本では、人の心や社会の流れ
 を慮りながら、力を内に向けて
 自らを磨くことで調和を求めてき
 た。その心がけを嗜みという。
 和歌、能、茶道や柔道など、
 文武の芸を極めるための努力
 を続けることを通じて、高い
 精神性やつつしみ、他へのい
 たわりを身につけることを目

近藤誠一



もったいない 語辞典

指す。そして他人の嗜みを評価す
 る素養を持つことも大切だ。
 嗜みは、自分の貴賤や男女を問
 わない。雨宿りに来た太田道灌に
 「山吹」の一枝を差し出した貧農
 の娘の逸話（常山紀談）や、敗走
 する敵の武将に対して矢をつがえ
 つつ和歌の下の句を詠むと、相手
 が馬を止めて直ちに上の句を詠み
 返したという逸話（古今著聞集）
 など、貧農の娘にも、猛き武者に
 も和歌の嗜みがあったことを歴史
 の文献は教えてくれる。
 グローバル競争が激化し、
 憎しみや諍いが進む世界を
 和らげるのは、自己の正当性
 の主張ではなく、自らを律す
 る嗜みという日本の心ではな
 いだろうか。（元文化庁長官）